

(海上自衛隊幹部学校 S S G コラム 180 2020/11/24)

大分に眠るドイツ海軍兵への墓参・2

—— 未来につなぐ献花と植樹、日独修好160周年へ ——

ドイツ連邦共和国が急速にインド太平洋への関心を高め、我が国との結びつきも強めようとしている。2020年9月には、「インド太平洋外交指針」(Leitlinien zum Indo-Pazifik)が公表され、SSGコラムにおいても取り上げた¹。

日独の関係は、1861年1月の日普修好通商条約締結に端を発しており、まもなく日独修好160周年の節目を迎えることとなる。

こうした情勢の下で、今後の日独交流発展の象徴となりうる行事が令和2年11月13日に大分において行われた。在京ドイツ大使館武官カーステン・キーゼヴェッター大佐(Karsten Kiesewetter) (以下、武官と表記) による大分県及び大分地本の支援を得た第一次世界大戦時のドイツ捕虜病死者への慰霊祭の挙行である。同武官による大分への墓参は、令和元年12月に友人である海上自衛官2名(海幹校 本名1佐、海幕 長野1佐)の墓所調査協力及び案内により、まずは私的に行われた²。その際、墓碑の管理状況に感動した武官が、管理する大分県知事宛に礼状を送付したことを契機とし、公的な慰霊祭の実施による日独交流が実現した。

未来につなぐ献花

大分市の桜ヶ丘聖地(陸軍墓地)には、多数の我が国の戦没将兵の墓碑に交じって、2人の第一次世界大戦中に病死したドイツ捕虜の墓碑がある。武官の曾祖父の弟であるユリウス・パウエル・キーゼヴェッター後備海軍歩兵(Julius Paul Kiesewetter)は、1917年5月9日に病死して埋葬されており、その隣には、1916年4月に病死したリヒャルト・クライン(Richard Klein)後備海軍歩兵が眠っている。



図1：桜ヶ丘聖地(大分県高齢者福祉課提供)

¹ 拙稿「ドイツ連邦共和国がインド太平洋外交指針を公表」海幹校SSGコラム178 2020年10月
<https://www.mod.go.jp/msdf/navcol/index.html?c=columns&id=178>

² 拙稿「大分に眠るドイツ海軍兵への墓参」海幹校SSGコラム149 2019年12月
<https://www.mod.go.jp/msdf/navcol/index.html?c=columns&id=149>

11月13日（金）、桜ヶ丘聖地に到着した武官は、墓地の入口で挙手の敬礼により、日独の死没者に敬意を表した。スピーチにおいては、病死した捕虜兩名の経歴や長年に渡る墓地の管理に対する謝意が述べられ、日独修好160周年の節目となる来年の再訪への希望が示された。

次いで、武官による献花が実施され、ドイツ連邦軍音楽隊との親善行事での演奏経験もある陸自西部方面音楽隊 矢口幸一 1等陸曹のトランペットによるドイツの追悼曲「私には戦友がいた³」”Ich hatt’ einen Kameraden”の奏樂は、式典をより荘厳なものとした。



図2：献花する武官

ドイツ側の追悼曲に続き、日本の戦没者への敬意を払いたいとの武官の希望により、日本側の追悼曲「国の鎮め」が奏樂され、武官及び自衛官参列者は、挙手の敬礼により、病死者及び戦没者を追悼した。

続いて、参列者の献花が実施され、捕虜兩名の墓碑は、花や供物で埋め尽くされた。



図3：慰霊祭終了後の墓碑の様子⁴

³ この曲は、当時、他の収容所で行われた捕虜の葬儀において、合唱された記録が残されている。エーリッヒ カウル『エーリッヒ・カウルの日記』宗宮好和監訳、千葉県日独協会、2020年、93頁。
https://www.city.narashino.lg.jp/citysales/kanko/bunkahistory/narashinosinobunkazai/GermanPOW_Historical-Materials.files/ErichKaulTagebuch_Jp.pdf

⁴ 図2、3：自衛隊大分地方協力本部撮影

この慰霊祭においては、前回の墓参終了後、約1年間の筆者による研究成果が式典の執行等に反映された。調査の対象を国内の文献にとどめることなく、ドイツの文献やサイトに拡大することで、病死した捕虜両名の詳細な経歴が判明し⁵、それらは武官のスピーチに反映された。

また、昨年の墓参時点でクライン氏の顔写真は入手できていなかったものの、上記のドイツ研究者が開設したサイトの資料によって得られ、公式の慰霊祭に際して、捕虜両名の遺影を供えることが実現した。これらは、研究によって得られた知見が交流に寄与した事例として、新たな戦史研究の意義及び研究成果の活用先を開拓することとなり、本校としても意義深いことであった。

日独交流の今後 間近に迫る修好160周年の節目

慰霊祭終了後、ドイツ大使館と大分県代表者による植樹が実施され、武官は、「木を植えることは未来を信じること」とし、植樹を通じた日独関係の未来への期待を語った。

では、日独修好160周年の節目において、その未来は、どのように形成されつつあるのだろうか？

冒頭述べたドイツの「インド太平洋外交指針」やこれを概ね是認する我が国政府の姿勢からは、両者の関係は一層、重要となり強固となっていくことが見込まれる。

この行事から3日後の11月16日、山村海上幕僚長とクラウゼ独海軍総監との間でテレビ会議が実施され、インド太平洋地域におけるより積極的な関与のため、様々な分野において海自と独海軍の協力関係を一層強化することで一致がみられ⁶、両国の関係におけるシーパワーの重要性が強調された。

そもそも、日独修好のはじまりは、ドイツのシーパワーによりなされており、両国の関係をつなぐものとしての海の重要性は不変であるにとらえられる。

1861年1月に日普修好通商条約の締結により、日独（普）の国交を開いた「オイレンブルク使節団」は、軍艦4隻で構成された艦隊による儀礼的護衛により⁷、日本に到着した。アジアにおいて欧米列強が威圧手段としての軍艦を重要視していた時代の出来事であり、米国の黒船と同様に当時のドイツもシーパワーによって国交の樹立を迫っている。

なお、この過程で4隻からなる艦隊の1隻、フラウエンロープ(SMS Frauenlob)が台風により横浜沖で沈没し、乗員44名が消息不明となっており、命がけで得た国交であるといえる。

一方、大分においても地道な交流の芽が出ようとしている。

慰霊祭の翌日、桜ヶ丘聖地において、武官夫妻と平素から墓地の清掃管理にあたっている地元の方々との交流行事が執り行われ、相互にプレゼントの交換等が実施された。手作りの日独小旗により歓迎された武官夫妻は嬉しそうに再訪を誓った。

⁵ Herrn Hans-Joachim Schmidt “Die Verteidiger von Tsingtau und ihre Gefangenschaft in Japan”
<http://www.tsingtau.info/>

⁶ 海上自衛隊 facebook 2020. 11. 16 更新。

<https://www.facebook.com/161912430537150/posts/3629767903751568/>

⁷ 大井知範「ドイツ海軍 海軍の創建と世界展開」『ドイツ史と戦争』彩流社、2011年、239頁。



図4：地元の志手地区の方々との交流行事⁸

このように日独関係においては、今後もドイツ海軍及び海上自衛隊の関係は、一層、重要となっていくと考えられる。地元での交流も活性化が期待される。こうした両国の関係の発展を大分に眠る二人のドイツ兵は静かに見守り続けるであろう。

(海上自衛隊幹部学校 戦史統率研究室 本名 龍児)

【追記】当時の大分捕虜収容所の様子については、本行事終了後の報道により詳しく説明された⁹。本稿においても、筆者が慰霊祭翌日に大分県立図書館所蔵の資料で得たエピソードを紹介したい。

エピソード：大分捕虜収容所で行われていた遠足の様子

当時の収容所は、捕虜の人格を十分に尊重し、相当な自由を与えた管理体制であったとされており、大分もその例外ではない。例えば、一定の条件下で外出や飲酒も許可され、週に1度の遠足が何よりの楽しみであったとされている¹⁰。

遠足の行き先は、大分市内の寺社などであった。西寒多神社の記録には、その状況が詳細に描写されていた。大正7年4月5日には120人の捕虜が楽隊に合わせてパレードしながら参拝し、境内各所に散らばって折り詰め弁当を食べ「学童ノ遠足ニ弁当ヲ開クニ髻髻タリ」という状況だった。売店で洋酒を飲んだり、果物を食べる姿は「恰モ活動写真ヲ見ルガ如シ」だったとあり¹¹、当時の収容所の生活が、より鮮明に明らかとなった。

(本コラムに示す見解は、海上自衛隊幹部学校における研究の一環として執筆者個人が発表したものであり、防衛省・海上自衛隊の見解を表すものではありません。)

⁸ 森本卓哉氏撮影

⁹ 一例として、寿柳聡「ドイツ武官、日本でたどった祖先の足跡」朝日新聞、2020年11月14日 <https://www.asahi.com/articles/ASNCF72SYNCDTPJB00Q.html>

¹⁰ 長野晋作「大分に眠るドイツ兵がもたらした日独交流」『戦史秘話』防衛研究所HP 2019年。

¹¹ 西寒多神社編「豊後一ノ宮西寒多神社御遷座六百年史」西寒多神社、2009年、83-84頁。